

心よきものには

常に春祭有り

平成二十六年の新春を皆様ご機嫌よくお迎えの事と存じ上げ、心からお慶び申し上げます。

京都で迎える元旦も、三十回を数える事となりました。

京都—この古い都の永い歴史、時の流れは、私達に多くの夢とときめきをもたらします。水の都と呼ばれる様に、清らかな澄んだ川の流れ。その源には都を囲む山々があり、折々の語らいと祈りを秘めています。神々が集い、諸仏諸菩薩が雲集し、人々の生活を通して文学、芸術が生まれ、多くの「いのち」が育まれてきた大きな神秘性を持つ豊かな舞台です。舞台は、人の「いのち」の向こう側にある心を生かす所です。今、国内外の多くの人々は、この地に古の神秘性豊かな心を求めて、この大きな舞台に触れようとして京都を訪れます。京都を思えば、大きな一枚の布でしょう。

布を例えにとつて釈尊は、一つの教えを説いておられます。『中阿含』の『布喻経』(南伝大蔵経九十卷 六十頁)、漢訳經典の『水浄梵志経』(大正蔵経一卷 五七六頁)に当たり、漢訳ではより具体的に二十一の汚れた心、二十一の清浄なる心の例を挙げて、教えを説いています。

「心よきものには常に春祭有り。」

の一偈を中心に「よごれた布、けがれた布、垢染みた布は色鮮やかに染める事ができません。鮮やかな染色を望むならば、先ず布がきれいで清らかでなくてはなりません。それと同じようにいかなる人もその日々の生活は、先ず心が清らかでなければ良い結果を得る事ができない」という教えを説き、その結語として一人の守護者のためにこの偈を説かれました。人々は、祈りを捧げながら福を招き、幸せを招く事を常としておりました。春祭りはその祈りの一つです。春の初めの満月の夜にその年の風雨の穏やかなる事、気候の順調である事を一心に祈り、一年の平穩無事を望んでいました。年頭に当たりあじわいたい一偈です。

お釈迦さまは、布は清くあればこそ、はじめて鮮やかな染色が期待されるように、一日一日を大切に好日を迎え、良き年を期待するのは心清き人々であると諭されました。今年一年どうぞやさしい言葉で、やさしい心を語り合いながら「あなたのお話しお聞きます」というご浄行にぜひご努力下さい。

京都は一枚の大きな布です。人々の浄心浄行によって清らかなそとして、美しい文学、芸術が描き出されました。

醍醐寺はその証あかしを文化財として多く伝承しています。

醍醐寺百三世 仲田順和